

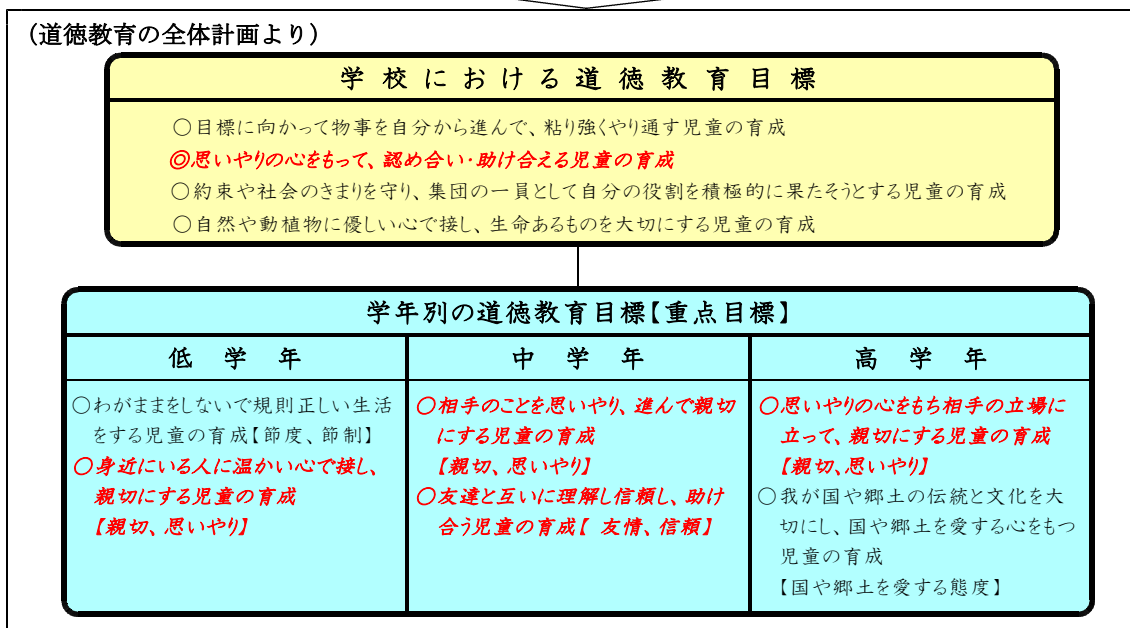
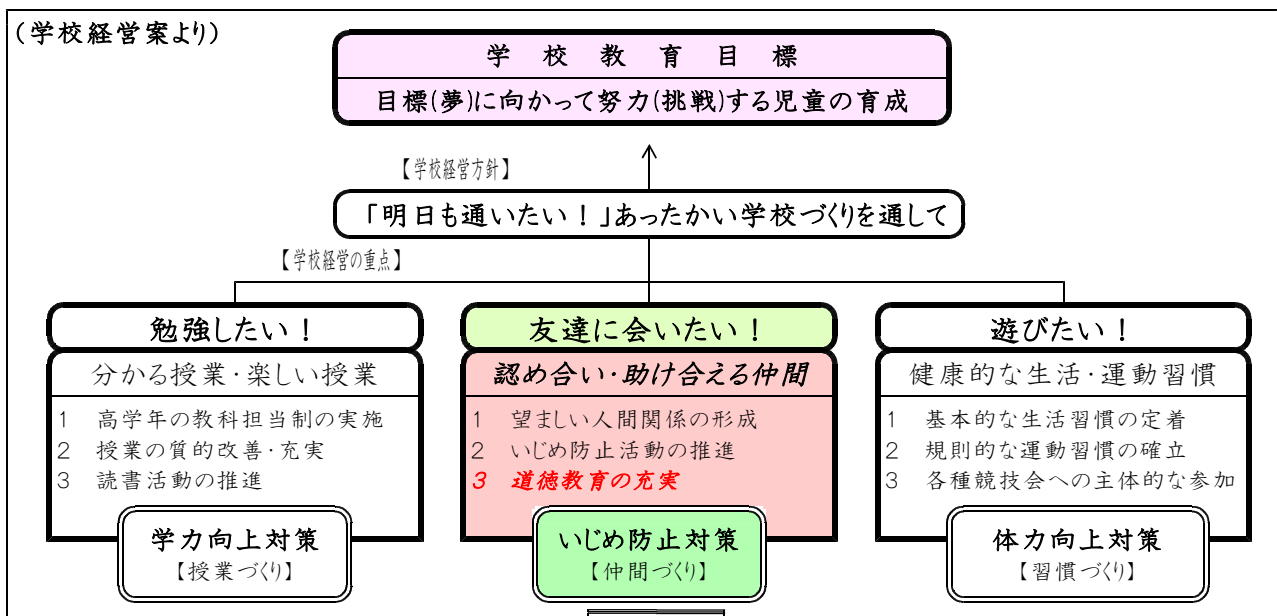
思いやりの心をもって、認め合い・助け合える児童の育成

～ 家庭との連携による道德教育の充実を通して ～

東吾妻町立原町小学校 今泉 敦子

1 研究のねらい

道德教育の改善に関する議論の発端となったのがいじめ問題である。道德教育には、児童にこうした現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成していく上で、大きな役割を果たすことが求められていると考えた。そこで、本校では、道德教育をいじめ防止対策の重点と位置付け(下図参照)、児童自身が問題意識をもって仲間と語り合い、考えを深めていく道德科の授業への質的転換を図るため、より効果的な学習過程や指導方法、評価方法の工夫・改善に取り組んできた。



なお、いじめ問題に関する教材を扱う場合は、「いじめる側」「いじめられる側」「傍観者」の視点から考えさせたり、問題場面において「何が問題なのか」「自分ならどう考え、行動するか」を話し合わせたりすることで、児童がいじめを許さない姿勢をもって正義の実現に努めようとする態度を育てていきたいと考えた。

さて、本校では、本研究を推進する際に、児童の道徳性の基盤は、学校教育だけではなく、家庭生活における様々な体験を通して養われると考えた。そこで、本研究では、保護者に授業前に親子で教材について話し合ってもらったり、授業後の振り返りにコメントしてもらったりして、道徳教育に関する親子の会話を増やすなど、家庭との連携による道徳教育の充実を通して、「考え、議論する道徳」の実現に向けた効果的な学習指導の工夫・改善に取り組むことにした。

こうした取組を通して、本校では、学校経営課題である「いじめ防止対策」に繋がる道徳教育目標（重点目標）の実現を目指した。

2 研究の内容

道徳教育を推進する上で、学校と家庭や地域との連携・協力は不可欠であると考えます。特に、家庭は、子供の教育について第一義的な責任を有するものであり、児童が生活のために必要な習慣を身に付けるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図る上で、その果たすべき役割は極めて大きいと言える。

そこで、道徳科の授業が家庭との連携を進める重要な機会になると考えられることから、本研究では、授業の実施に保護者の協力を得たり、保護者の協力を授業の実施に生かしたりしながら、「考え、議論する道徳」の実現に取り組んだ。

(1) 授業の実施に保護者の協力を得る

① 道徳科の教科書を使って家庭読書【家読】^{うちどく}に取り組んでもらう。

ア 親子で教材（次時で扱う教材）を読む。

イ 親子で教材の感想を語り合う。

（例）このクマさんの目かわいいね。

この主人公のとった行動どう思う？

② 親子で宿題（主発問に関わる学習課題）に取り組んでもらう。

③ 親子で授業を振り返ってもらう。（保護者に授業で使ったワークシートの記述にコメントをもらう）



(2) 保護者の協力を授業の実施に生かす

① 家庭読書【家読】（これができなかった児童には朝読書の時間を利用させることも可とする）によって、児童に教材理解（人間関係や事実関係等の確認）をさせる指導時間を縮減する。

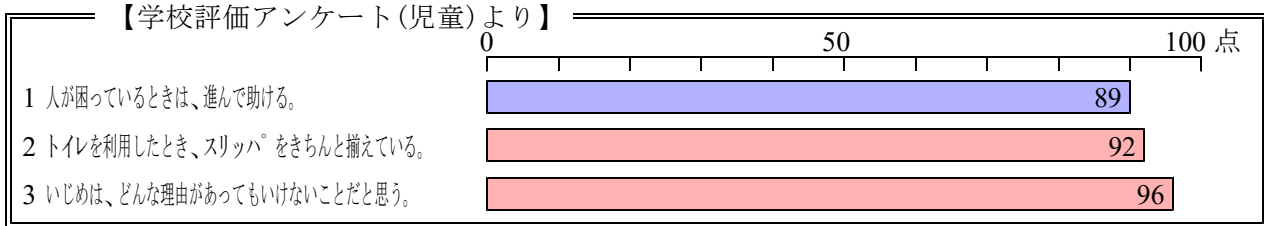
② 宿題（主発問に関わる学習課題）を課すことで、授業において、主発問に対して児童がワークシート等に「考え、表現する」学習時間を縮減し、「議論する」学習時間を確保する。



3 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

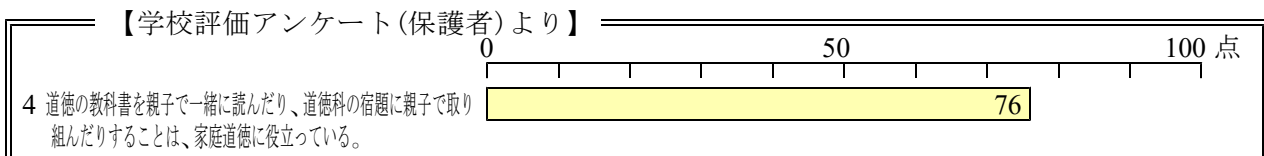
① 本研究主題「思いやりの心をもって、認め合い・助け合える児童の育成」の実現状況について



質問1及び2の回答からは、よりよい人間関係を築く上で求められる相手に対する「親切、思いやり」に関する道徳性の育成が、質問3からは、友達関係において基本姿勢となる「友情、信頼」に関する道徳性の育成が図られている状況がうかがわれる。これは、本校における異年齢集団活動（縦割り清掃や団別遊び、通学班登校等）やいじめ防止活動の取組を、道徳科を要とする学校の教育活動全体を通じて、児童に道徳的価値の意味やそれと自己との関わりについて考えさせてきたことによると考える。また、各学年において、いじめ問題に関する教材を扱い、道徳的問題場面では「何が問題なのか」「自分ならどう考え、行動するか」を話し合わせたことにもよると考える。

② 家庭との連携による取組について

道徳科の宿題（主発問に関わる学習課題）を児童に課すことで、親子で教科書を一緒に読んだり、親子で道徳的問題場面について話し合ったりする機会を家庭にもたせることができた。



質問4の回答からは、家庭との連携による道徳教育の取組が、保護者において評価されつつあることがうかがわれる。これは、教科書を通して家族と語り合うことによって、保護者が子の心の成長を実感できる機会が増えてきたためと考える。

特に、この取組は、道徳科の授業において、児童に教材理解（人間関係や事実関係等の確認）をさせる指導時間や、主発問に対して児童がワークシート等に「考え、表現する」学習時間を縮減し、児童に「議論する」学習時間を十分に確保することができたので、道徳科の授業の質的転換を図る上で有効な手立てであることが分かった。

(2) 今後の課題

道徳教育への参加・協力の姿勢に家庭差があるので、今後も引き続き、学校から家庭に直接的、間接的に働きかけていく必要があると考える。